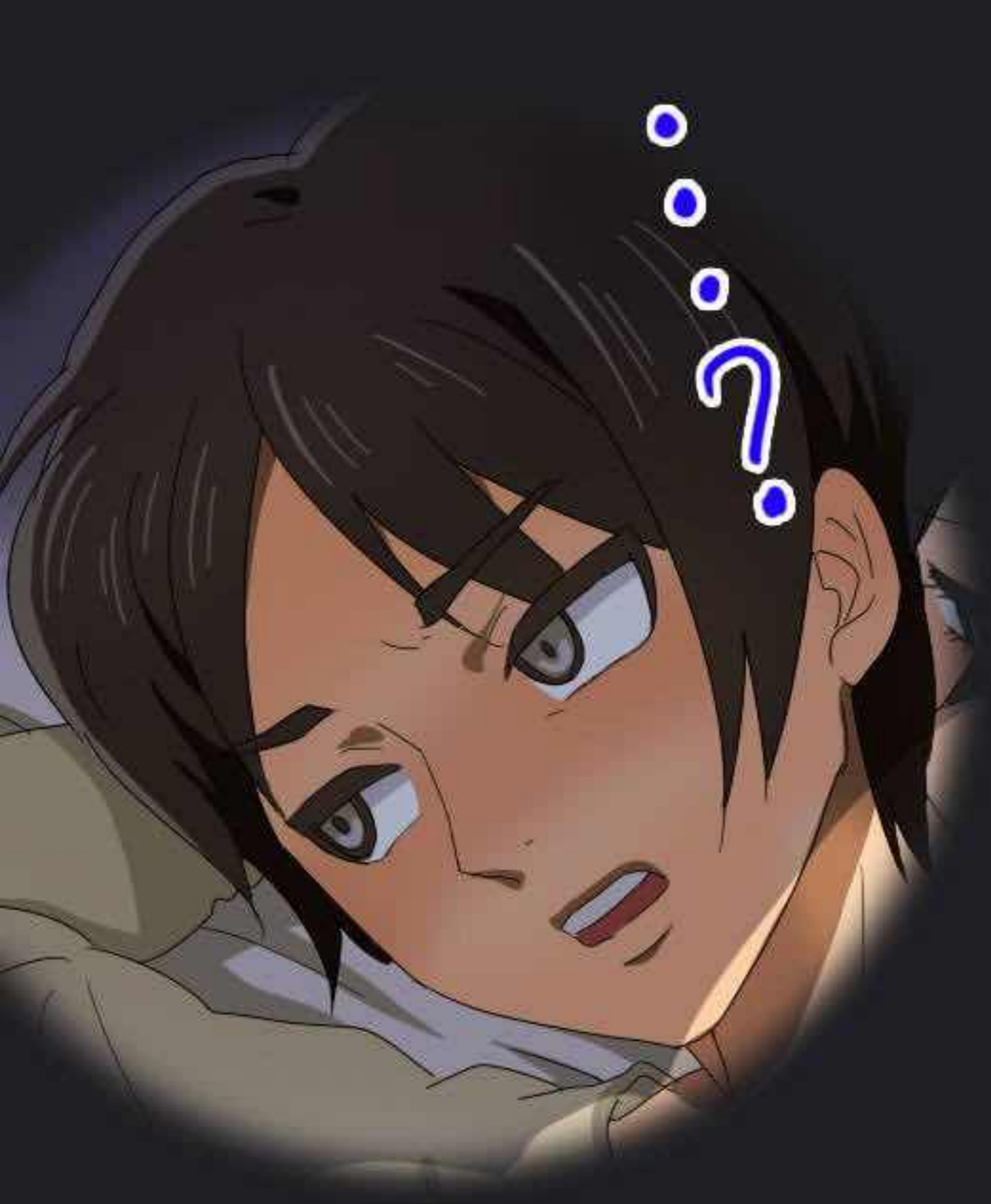
ンくっ
「エ●ンの雄の匂い
いっぱい擦り込んでぇ♥」
逆レイプを
仕掛けてくる
幼馴染と
たっぷり中だし
種付けセックス♪
騎乗位、バック、騎乗位、騎乗位、騎乗位!!
進○の夜這い

その日、エ●ンは宿舎の自分のベッドで
訓練に疲れた体を休めていた。
うとうととし始めた時、ふと、背後に人気を感じた。



エ●ン
巨人により家と家族を失った事で
巨人を駆逐することを心に誓う。
復讐に燃えている。

!?!

?!ミ●サ…?!

ミ●サ
エ●ンとは幼馴染。
その昔エ●ンに命を救われた事を
きっかけに彼に執着するようになる。
彼から貰ったマフラーは
暑い時以外は身につけている。
対人格闘技の成績は1位。
趣味はエ●ン。

ギュ

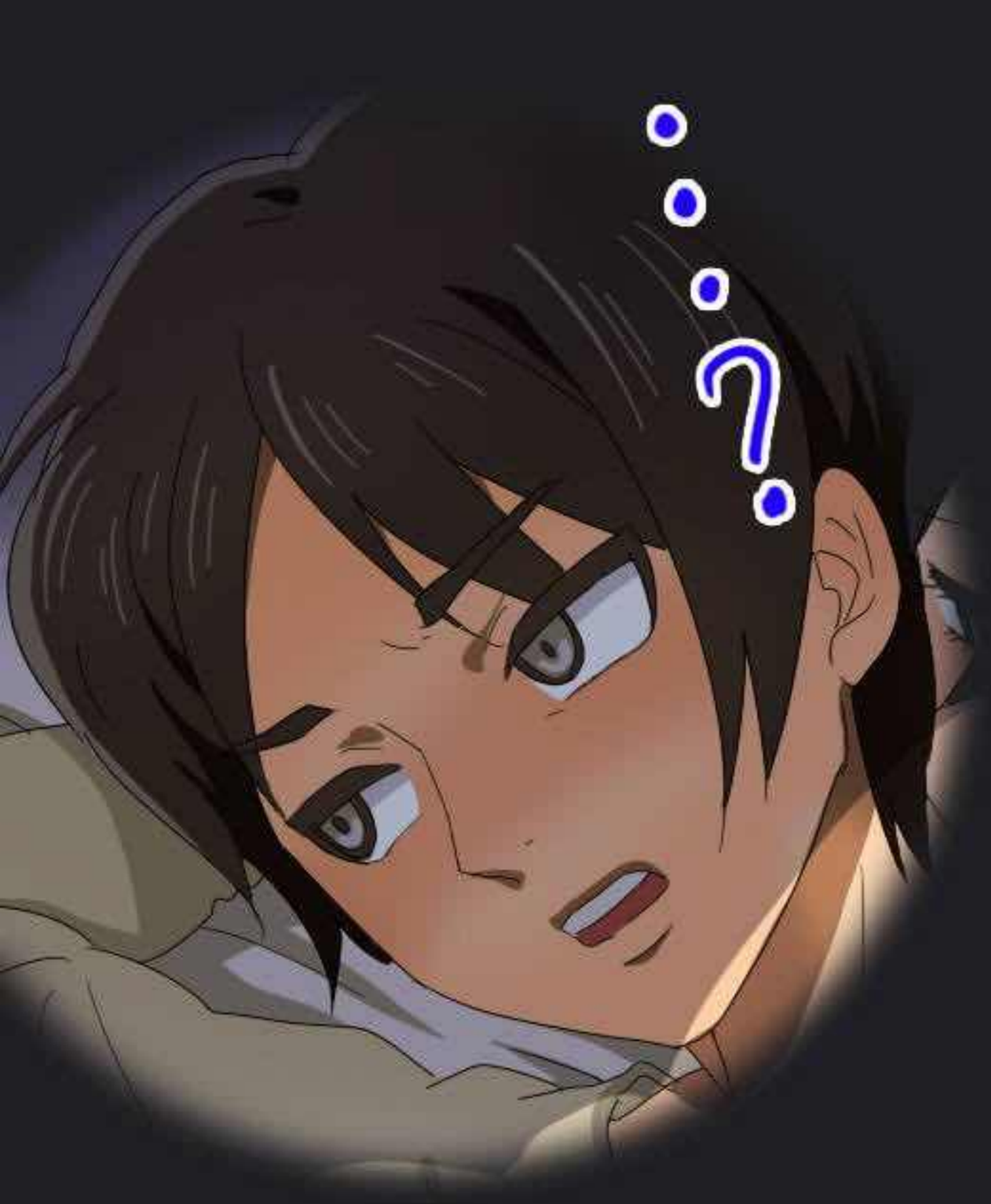
0
0
0

「エ●ン…今日も訓練お疲れさま…」
「おいミ●サお前一体どうやって俺のベッドに…
ばれたら一大事だぞ、何考えて…」
キィ〜〜
トク〜
トク〜
「大丈夫。心得ている。
ところでエ●ン、物寂しいでしょう」
「おい、下に人が寝てるんだぞ
本当に何考えて…!」
モゾ♡
モゾ

『今日、皆が言ってるのを聞いたの。
男の人はこうやって気持ちいい事をするのが必要なんだって…』
「ば、馬鹿やめろ…」
ドキ♡
ドキ♡
「やめろって言って、どんどん大きくなってる。
私に扱いて欲しいんでしょう？」
「お前がそういう馬鹿な真似するから…」
ボロン

「エ●ンの雄の匂い
いっぱい擦り込んでぇ♥」
逆レイプを
仕掛けてくる
幼馴染と
たっぷり中だし
種付けセックス♪
騎乗位、バック、騎乗位、騎乗位、騎乗位!!
進○の夜這い

その日、エ●ンは宿舎の自分のベッドで
訓練に疲れた体を休めていた。
うとうととし始めた時、ふと、背後に人気を感じた。



エ●ン
巨人により家と家族を失った事で
巨人を駆逐することを心に誓う。
復讐に燃えている。

!?!

?!ミ●サ…?!

ミ●サ
エ●ンとは幼馴染。
その昔エ●ンに命を救われた事を
きっかけに彼に執着するようになる。
彼から貰ったマフラーは
暑い時以外は身につけている。
対人格闘技の成績は1位。
趣味はエ●ン。

ギュ

0
0
0

「エ●ン…今日も訓練お疲れさま…」
「おいミ●サお前一体どうやって俺のベッドに…
ばれたら一大事だぞ、何考えて…」
キィ〜〜
トク〜
トク〜
「大丈夫。心得ている。
ところでエ●ン、物寂しいでしょう」
「おい、下に人が寝てるんだぞ
本当に何考えて…!」
モゾ♡
モゾ

『今日、皆が言ってるのを聞いたの。
男の人はこうやって気持ちいい事をするのが必要なんだって…』
「ば、馬鹿やめろ…」
ドキ♡
ドキ♡
「やめろって言って、どんどん大きくなってる。
私に扱いて欲しいんでしょう？」
「お前がそういう馬鹿な真似するから…」
ボロン

『エ●ンのカウパーがぬるぬるで手が気持ちいい？』
『体何処でこんな事を覚えてきやがった…』
はぁ
はぁ
ぎゅう
ぬるぬる
『どんどん硬くなってる…エ●ンのって凄く立派ね』
『はぁはぁ…くっそ…やば、イキそう…』

『っく…！あ…！』
は♥
は♥
キしゅうう
っく…
あ！
ドピュッ
しゅるる
しゅるる

『はぁ…はぁ…くそっ…なんでこんな…』
『エ●ンの、いっぱいでた…❤
私の中に出してくれたらもっとよかったのに
勿体ない…❤』
クスッ♪
はー
はー
ドクン
ドクドク
ぬちゅ
にちゅ
『勘弁してくれ…』

次の日の夜、エ●ンは昨晩のミ●サにされた事を思い出してムラムラとした気持ちに襲われた。
用を足して落ち着こうと思い
深夜、便所に向かったところ
そこにはミ●サが薄着でエ●ンが来るのを待っていた。

『うおっ?!
お、おま・・・ここ男子便所だぞ?!』

「…知ってる…」
「な、なに馬鹿みてえに口あけてるんだ…」
「…入れるの」
「は？」
あー
ドキー！
「エ●ンの、私の口に。
…昨日私があんなことしたせいで
ムラムラしてるんでしょう。
私が処理してあげる」
ドキー♥
（なんで知ってるんだよ…）

(こんな、胸が透けてやらしい恰好して誘ってきやがって…どうやって断われってんだ…)
マルッ♥
ビク
ん♥
キュン♥
ぎゅ
『んっ…♥おっぴぃ…♥』
『う、わ…これがミ●サの中…すっげえ気持ちいい…なんだこれ…』

「はぁ…はぁ…
やべぇ、そんな舌でカリんとこ刺激されると…
イキそうだ…！ミ●サ、もう良いって！
外で出すから！」
「らめ…❤ふひのなはにはひへ❤（口の中に出して❤）」
「っっ…！」

ゴプゥんん♪

はーー♪

ビクビク

トプン♪

はーー♪

「んんーっ❤」
「はぁ…はぁ…
ミ、ミ●サごめん、大丈夫か？」

ギュウウ

キュン

キュン♪

「エ●ンの…いっぱい…♥
こえがエ●ンのにほい…♥」

ドクン！
ドクン
は——♥

ホカ
ハァ
ホカ
は——♥
あふ♥

「わ、悪かったミ●サ…
今、吐き出す為の
布を用意すっから…」

ドクン
もじ
もじ

「ごっくん♥」
「え？」
「んっ…♥ エ●ンの凄く濃厚で喉に絡みついて…♥美味しい…♥」
ピク
きゅうう♥
ごくっ♥
はぁ
はぁ
トローン♥
「…！飲みやがった…！」
「エ●ンのものなら、飲めて当然…♥」

食堂の端の席でエ●ンが夕食を取っていると突然、下腹部に生温かい違和感を覚えた。視線を下にやると、そこにはエ●ンのペ◎スを嬉しそうに擦っているミ●サの姿があった。

（お、おいここは食堂だぞ

何やってんだバカ…！）

（今日はエ●ンの部屋まで行けそうになかったから

我慢できなくて…）

《こんなに大きくなってる…♥》
《お前が刺激するからだろ…！
向こうのテーブルにまだ何人も人が居るっつーのに
バレるだろ！早く止めろ！》
《…今度、セッ◎スしてくれるって
約束してくれたら、止める》
《そんな事、できるわけ…！》
ムワァ
ピクッ
しこ

（なら、続ける）

（う・・・！昨日のより、ねっとりと熱い…）

（エ●ンのつるつるしてて可愛い・・・❤❤）

先端からカウパーが溢れてる・・・❤

気持ちいいのね）

（んん…っ❤）
（だ、ダメだミ●サー！これ以上は…
わかった、約束する！約束する！だから…）
じゅぷ
ぢゅぷ
ぬりゅぷ
ぬちゅぷ
ビクッ
ビクッ
（はひを？（何を？）
（畜生、わかってるだろうが！）
「おーい、エ●ン。さっきから様子がおかしいけど
大丈夫か？」
「？！」

「だ、大丈夫だ！大丈夫だからあっち行ってくれ！」
「あっち行けだなんて酷いな」
じゅるるるるるるー
じゅぷぷぷぷぷぷ
「？なんか変な音が聞こえないか？」
「いいからあっちへ!!」
「おっかねー…」
（うくっ…人の目の前で
そんなに音立てて吸ってんじゃ…！あっ…！）
ぬぷぷぷぷぷ
ガリ
ガリ

（イクっ…！）
（あっ♥）
ビュルル
でてるビュル
（らひて♥ わらひのくひのなはにいっぱい♥…）
（あ…ああ…！まだ出る…！）
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ

（ひゅほい❤　ほんなにいっぱい…❤
えへんのあっはかくてきもひいい❤
ふひのなはにはふはんこひのが
はひってくる…❤）
ふぁ～ン
ビュルル
ビュルル
ビュルル
ぴゅ
ぴゅ
（はぁ～…はぁ～…
ああ…くそっ…
またミ●サとこんな事…
しかもテーブルの下で死角とはいえ
前に二体何十人の人間がいると…）

《お、おいミ●サ
最後までしっぱりやりやがって
さっき言った事は無しだからな…》
ごっくん
《…？ごくん♥》
はー
はぁ

（美味しかった♡
エ●ンは、約束するって言ったから
明日またエ●ンの部屋に行く…♡）
はぁ～
あ～
（……）

次の日、訓練中に足を痛めたエ●ンは
進んで名乗り出たミ●サに
介抱される事となる。
救急道具の置いてある無人の建物の中に入ったミ●サは
手当てを終え容態が安定したのを確認すると
これは好機と思わんばかりに服を脱ぎエレンに覆いかぶさった。

『エ●ンわかる？これが女の人の大事な所…』
『おぶっ…ちけぇよ！』
『あ…♥エ●ンの吐息がアソコに当たって…
凄く興奮する…』
「この変態女…」
ドキ
ドドキ
『ねぇみえる？エ●ンに、私の大事な所
見られてるって思うと凄く濡れてきちゃうの…
舐めて…♥』
さわ
さわ
ペロ

「……ちゅぷ……」
「んんっ❤」
「ぬちゅっ……ちゅぶっ……
なんだこの匂い……すげぇムラムラする……」
「あっ❤ エ●ンの舌っ……凄く気持ちいいっ……
ああっ……❤奥まで……❤きてっ……❤」
はぁ
あ♥
はぁ♥
「じゅるるるっ……じゅぶっ……にちゅっ……
奥の方からどんどんつゆが溢れて……」
「やっ❤あっ……おま◎この奥までエ●ンの舌が届いてる❤❤
エ●ンにこんな事して貰えるなんて❤❤
ああ……❤私もエ●ンのおち◎ぽ気持ち良くしてあげる」
ぬちゅ
チュプ

「Hの中の性感帯をもみもみ
されちゃう…♥あの指先の動き…
いやらしくもあり…やさしくもあり…♥
まるでHの達人みたい
声の出ちゃうポイントを
ピンポイントで攻めてくる♥」
ぐにゅ
ぐにゅ
ぐにゅ
ぐにゅ
ぐにゅ
ぐにゅ
「ひぐぅぅぅ…ぐぅぅ…ぐぅぅ…
…いきなり…ぐぅぅ…ぐぅぅ…
ぐぅ…強すぎ…ぐぅ…ーー」
「あぁん♥大丈夫だよHの達人
思ったより…ずっとやさしくて…♥ポイントをピンポイントで攻めてくる♥」

『あああああっ♥♥♥♥』
ビクンビクン
はっ♥
はっ♥
ああ
あ
ビクンビクン
ビクンビクン
ビクンビクン

「はぁ…はぁ…❤
凄い…❤ エッチってこんなに
気持ちいいの…❤
ねぇ、エ●ン、興奮した？」
「ああ…すごく…」
は――♡
は――♡
「エ●ン、私、イッたばかりなのに
まだお腹の奥の方が疼いてる…❤
エ●ンのおち●ぽもイッたばかりなのに
まだガチガチにぶっといわ…❤
ねぇ、中に入れましょう…？」
しこ
ぎゅん
きゅん
とろ～♡

「ふふ❤私のおま◎こから
溢れたおつゆと
エ●ンの唾液…
それにあなたの
カウパーやザー汁で
ぬるぬる滑って
気持ちいい…？
今、スマタしてるの」
「はぁ…はぁ…
なんだこれ…
気持ちいい…」
「エ●ンの乳首、
硬くなってる❤
女の子みたい❤」
「あっ、摘むなって」
ん…♥
ビクッ
ぬるっ
ぬるっ
ぬちゅ
にちゅ

『!! あっ…！
く、クリ◎リス
こしゅれて…！
ふあっ…
ぬるぬるして
凄いっ…！
あっ❤腰が止まらない
のおっっ❤❤
エ●ンのおち◎ぽに
クリちゃん擦りつけて
いっちゃうううっ」
ハッ
ハッ
ハッ
!!
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ヒクッ
ヒクッ
ヒクッ
ぬじゅ
ぬじゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
ぷしゅ
ぷしゅ
ぷしゅ
キュッ
キュッ

『んああ
ああっっ
❤❤❤』
ビクッ
ビクッ
ハッ
ハッ
ハッ
ハッ
ああ♥
あ♥あ♥
キュウウウ
ゴリュ
ゴリュ
ゴリュ
ゴリュ
ぬじゅ
にじゅ

じゅわあー♥
ヒクッ
ヒクッ
ヒクッ
「ひぁぁ…❤こんなの
はじめて…❤
エ●ンの身体、温かくて
すっごく気持ちいい…❤
ねぇ、私のクリ◎リスから
おま◎こが、ぴくぴく
痙攣してるのわかる…？
イッたの…エ●ンのおち○ぽに
猿みたいに腰を擦りつけて
イッたの…❤❤」
「すげぇビクビクいってるのが
伝わってくる…
俺もう先走りが止まんねぇ…」
「私ばかりいっちゃってごめん…
今度はあなたの事
いっぱい気持ち良くしてあげる❤」
ドクン
ドクン
は―
は―♥
くに
くに

「ふふ❤立体機動装置のベルトを付けたら
もっといやらしくなるかと
思って付けたの…❤エ●ン、興奮する？」
「ああ…」
「そんな事よりも早く挿れさせろって
顔してる…❤」
「…」
「図星❤」

「エ●ンの為に、ずっと処女とっておいたの…❤
こんなおっきいエ●ンのおち◎ぽじゃ私は痛いかもしれないけれど
キツイから、あなたは絶対に気持ちいい…❤」
「え、それじゃあもっと慣らした方が…」
はぁ～♡
ドキ
ドキ
「いいの…❤ もうエ●ンの唾液と私のエッチなおつゆと
エ●ンの先走りカウパーでおま◎こぐちょぐちょ❤
それにあなたが気持ち良ければそれで何もかもいいの❤
それじゃあ、いくわ…」
ぬちょぉ♡